

5. 被害者支援への要望・社会への発信

最後にインタビュー協力者の方々に、「被害者のための支援について、日頃お感じになっていること／こうなってほしいという要望などがありましたらお聞かせください」と尋ねました。以下のように、多くの意見を寄せていただきました。

【検察の対応への要望】

検察の対応に不快な思いをした方はつぎのように要望しています。被害者側に寄り添った対応として「一緒に怒って」ほしいと表現しています。

「被害者支援の方にはこれからも頑張ってもらいたいと思うんですけど、検察庁の人たちがダメダメだから、もし被害者の人がへこんでたりしたら一緒に怒ってあげてください。」(S1)

【早い段階で必要な情報を提供してほしい】

情報提供について、被害後の司法手続の経過など総合的な情報が早い段階でほしかったという声がありました。

「何をしたらいいかが全然分かんないんですね、被害を受けて。支援センターの方が、…次こうしたらいいよ、こうなっていくと思うから、…とか、そういう話をしてくれたからよかったんですけど。(中略)そういうのを明確に分かるような情報が欲しかったなと思いました。ネットで調べても全然出てこないし、『犯罪被害者の方々へ』っていう冊子は支援センターの方からもらったんですけど、警察からはそれを見せてもらったこともないし、あれを一番最初にもらいたかった。」(S5)

また、子どものころ被害にあった方々は、早い時期の相談窓口の周知など情報提供の必要性を訴えていました。

「相談窓口とか、あることにはあると思うんですけど、それをもっと早く言ってくれって思います。中学のときとかに教えておいてもらえれば、もっと早く頼れたらうし。頭の片隅にあるだけでも違うんじゃないかなって思うので、十代のうちに教えてほしいかな。そういう教育じゃないけど、なんか保健体育でしようもないことを教えてるくらいだったら、役に立つことを教えてくれるとか、そういうことを教えてくれたほうが、将来じゃないけど、何かあったときに役に立つんじゃないかって思います。」(S6)

「今、自分が子供のころに比べて、すごく情報っていうのはいろんなところで手に入るようになっているので。やっぱり、そういう悩める子供に大切なここで相談できるとか、こういう目にあった時にはこういうふうにしたほうがいいよっていう情報がちゃんと信頼できる情報が届くといいなと思います。」(S7)

【性被害に対する学校での対応】

性被害にあった生徒に対する学校での対応について、何度も同じことを聞かないでほしい、情報共有して適切なところにつないでほしいという要望が挙がりました。この点については保護者とどのように情報共有し、子どものケアにつなげるか課題といえます。

「(学校で)結構何回も同じことを聞かれることが多かったので、情報共有じゃないけど、そんなに何回も話したくないから、つないで、情報はつなげておいてほしいし、できれば頼れるところとかにつないでもらえるようにしてくれたらいいなって思います。」(S6)

また、教員に対する研修についても言及がありました。

「・・・あとは、先生たちとかの理解じゃないけど、対応が、当たり外れが多いので、一貫して、一回どこかで(研修などを)やってから先生になってほしいなって思います。」(S6)

【被害当事者が社会に戻っていくための支援】

性被害という問題に関心を寄せ、被害者が住居や仕事など段階的に社会生活が営めるように、社会資源やサポートがあるとよいという具体的な提案がありました。

「自分のことではないんですけれども。やっぱりそういう被害にあったとか(について)、インターネットや SNS で見ていると、やっぱりすごく PTSD とかで生活がままならなくて、そういう状態で、何度も追い詰められていってしまうとか。何か無理に生活のために回復しなきゃっていうところをすごく感じてしまって。例えば DV とか、ホームレスの方とかに対して、宿泊施設があったり、生活保護を受ける時には一緒に付き添ってとか、そういうサポートとかあると思うんですけど。何かその性被害にあわれた方とかに対して、何か回復するまで住居の提供があったりとか、あとは仕事とかも、体調が不安定で休んだりしがちであっても、できることから仕事があって、その中でもちょっとずつ生活費が稼げて、みたいな段階的に社会に戻っていけるようなことがないと、見ていて、すごくつらいなと思ってしまう。」(S7)

立ち直るうえで、被害当事者の話を聴いたり自身の体験を話したりする機会が、支えや自分の力になるという発言もありました。

「やっぱり話を聞いてもらえるだけでも変化はあると思いますし、実際、そういう被害にあった方が参加してるケースもあると思うんです。病気のことでもそうですし、事件のこととかもやっぱりそういう体験した方でないと分からない部分も多いので、・・・(中略) 体験した方とかのそういうお話聞けたり、逆にそういう方にお話ができたりというのは心強くなるのもそうだし、自分の中で、こういうこともできるとか、こういう考えもあるのかというのを受け入れやすいのになって(思います)。」(S4)

【地域での安全を広くつくっていききたい】

この方は、娘が自宅に侵入した男から性被害にあいましたが、すぐに子どもたちが通う学校と連絡を取っています。地域での安全を広くつくらなくてはという強い思いをつぎのように語っています。

「被害にあったときも、すぐに同じ性犯罪を負ってほしくないという思いが。やはり自分の我が家だけで止めたいという思いがあったので、その当時、(犯人が)近くにいるかもしれないと思ったので、(きょうだい)が通っている中学校の先生はすぐ報告したのと、高校のほうにもすぐに言いに行きました。やはり地域での安全というところを、大きい輪でつくっていかないと、いろんな目がないとできない部分ってきつとあるなって私は思っていたので、オープンにしたほうが良いと思って、校長先生とかに、信頼、当然できるであろうと信頼しているので、お話ししたんですけれども…」(S2)

【被害者支援を知らない人に広めたい】

支援センターによるサポートに大いに助けられたと語る方は、被害者支援の広がりについて要望しています。

「被害にあったことのない人は、本当に犯罪被害なんて考えたこともないというか、被害者支援だとか犯罪被害にあうのはどうかとか、テレビのニュースで一瞬見て、かわいそうにと思って、ニュースが終わったら忘れるって。でも、ニュースが終わったって何年もものすごく大変な状況が続くし、私みたいにニュースにもならなくても何年もつらいのと思うと、やっぱり被害者支援ということについて、まだ全く知らない普通の人たちに知ってほしいなって。そのために私も自分の身近な誰かに伝えていきたいし、たくさんの方が知ってほしいなっていうふうに思ってます。」(S3)

【性被害にあった子どもにかかわる重要な問題提起】

ここで、子どものときの性被害についての問題提起をしたいと思います。

以下は、小学2年生のときに校内で被害にあったことをだれにも話さず、大人になった方の発言です。この方は親にも一切話さず、だれにも聞かれなかったもので、小さいころ「ひたすら忘れることができた」と語っています。しかし一方で、話さなければ犯人も捕まらないといったジレンマにも言及しています。性被害にあった子どもにとっての最良の選択は何か、どのような対応が望ましいのか、また被害を防ぐにはどうしたらよいのか、学校や関係機関が議論し実行に移していく必要があります。

「何か私の場合はほんとに言わない、誰にも言わなかったことが自分の回復っていう面にとってはよかったっていうふうにちょっと思ってしまうんですけど。でも、逆に継続的に(被害を)受けている場合はやっぱり一刻も早く、他の人に相談できて、その被害をストップできることが大事だと思うんですけど。」

「人に被害にあったことを話すっていうことについて、最初から周りに話せたほうが回復につながるのか、それとも周りに知られてないから、やっぱり周囲からの発言で、それに触れられることもないし。せっかく自分がひたすら忘れるっていう、小さいころはできたので。でも、それだとほんとに被害の実態が分からなくて、犯人の逮捕にも結び付かないっていうところで、何かほんとに被害にあった子供にとって、いい一番の選択っていうのはどういうことなのかなって(思います)。私は話せなかったっていう経験しかないんで、そういう、すぐに話せたっていう方はその後、どういうふうな感じなのかっていうか。そのことによって、どんな変化が、そういう方にはあるのかなってことは気になるというか…」(S7)

引用・参考文献

- 子安・丹野・箱田監修（2021）『有斐閣 現代心理学辞典』有斐閣
- 飛鳥井望編（2021）『複雑性 PTSD の臨床実践ガイド』日本評論社
- 読売新聞取材班（2022）『わいせつ教員の闇-教育現場で何が起きているのか』中公新書
- フラワーデモ(2020)『フラワーデモを記録する』（株）エトセトラブックス